NAKED EYES KOUICHI TSUKAMOTO

PART 2 - 5

INTERVIEW:KOUICHIRO GOSHO PHOTOGRAPH:TOSCIO TOMITA

起業家 KOUICHI TSUKAMOTO entrepreneur

塚本幸一

戦争は負けたけど商売で勝ったる。前も見ない後も見ない。

とあるパーティー会場で外人モデルとディスコティックダンスを踊る口髭のダンディな男の表情は笑みがこぼれ生き生きとしていた。ステップも実に軽やかで、遠巻きに見ている若の身体がリズムを刻み始めた。そんな一シーンが今も脳裡から離れない。

アカデミックが優とされる京都で「塚本のおとうさん」と慕われ、尊敬の念が集まる人物である。彼は滋賀県生まれで、復員後、模造真珠の販売を皮切りに身を起こし、全身汗まみれになって働き下着のトップブランド"ワコール"を築きあげた。京都商工会議所名誉会頭をはじめとして公職は数えきれない。エピソードや武勇伝も多い。

礼節を重んじ、負けん気正義感が強いせいか義憤に敏感である。要領世渡りは必要なことと認めるもお世辞上手や裏表のある人、空威張りする人を信用しないと言う。父親の権威失墜と家族制度が崩壊して行く風潮に疑問を抱き且つ嘆く。自らの家を、自らの国を守らんという意識を持ってこそ、人前の人間であるという。世界を知らず、金だけ出して血や汗を流さないこの国を憂いている。戦争はもう懲り懲りと真に思い、一人の人間として平和を願い国際貢献して行こうという意志も強い。

ます家族を愛し、国を愛するを生き方とすべきと信じる義の人である。

そして、もっと歴史を教え、学べと真顔で語る。

■ベンの暴力やトラックが家に飛び込んできた事件など、怖くなかったですか。「バカヤロー」となりません?

それ位、別に。全然歯牙にもかけないよ。卑怯者と思っただけだね。

そんなことより、この前講演の御礼封筒の中に皺くちゃのお札ばかりが入ってた。余程常識のない奴だよ。その方が、憤慨したね。善意で出向いてるのに、これでは心がないではないか。そういう訳の判らん輩に"バカヤロー"だ。(笑)

■環境が人を創ると言うが、戦争で死線を超えたことは大きな意味を持つのでは。

僕の戦争は特別なんだ。第一線の歩兵として爆撃を潜り、敵を目の当りに銃剣で戦った。

――戦争は負けたけれど、今度は商売で勝ったる。決して日本は劣等国ではない。信頼尊敬される国家に向けて再建　復興せにゃならん。――僕はその為に生かされたんや。三日間死線を彷徨った挙句生かされたのは、その為や。

神は戦友達との間で依怙贔屓されたのではない。これが生かされた僕の使命なんだ。でないと、何故生きているのか説明がつかない。

僕は死んで行った部隊の五二名の戦友の分も含め新しい日本をつくることを戦後の誓いとしました。

■日本は廃墟の中から僅か五〇年でこれだけの経済大国になったけれど……世紀末に何か気掛りなことは。

五〇年で出来たのだから、五〇年で潰れる可能性は充分ある。日本が元の木阿弥のがたがたになるのは簡単ですよ。まず第一に資源のない国だから、人間資本を肥やさないとね。知識だけじゃいかん。人格を生み出すことだ。日本にそれだけの教育がありますか。まず先生を育てること。生徒に親しみを持たれることはいいことだけど、まず信頼尊敬されないとね。次に家族……。次に国防……。次に……。

■立法、行政から見直しをということでしょうか。

そう。日本がこのまま有頂天になっていてはやがて魂まで抜かれてしまうだろう。

戦争の国民的大反省の上に、誇りが持て尊敬信頼される国家を自らの手で築くことだ。日本人は民主化、平和という表面的な語句にあまりにも弱く、盲従的で無気力だ。このままでは「墓のスラム」となり、国は壊れる。

憲法の内容をしっかり見直すべき時だよ。現代の日本は無関心主義が蔓延しすぎだ。

■安全も、支配も、社会認知も得ているが新たな経験、欲求は何か。

新たな事は考えていない。前も見ない、後も見ない、今に全力を費やすことだ。

ワコール五〇年計画到達に向けて命を懸けている。毎日、毎日が真剣勝負だ。楽に飛ばないで継続努力している。

初期の目標がもうすぐ到達できる。それから、新たな事を考えるかもしれない。

僕は何事も possible だと信じている。実現可能と信じて前進するべしと常に肝に銘じている。

昭和史の生き証人である。単に経営者、実業家というより、やはりここは起業家と呼ばせて頂きたい。前世紀の価値観を持つ人と単純に言う人は余りに短絡である。我々は信念のなさ、あるいは意気地のなさで、ぶらさがり人生を時の過ぎゆくままに送ってはいないだろうか。塚本の確信と挑戦の精神は今も来世紀にも生き続け、新時代の幕明けに一石を投じるに違いない。どんなものをも受容してくれる暖かい眼差しの中に、生死を超えた者だけが持つ強い眼光を感じた。

(敬称略)　文・五所光一郎　写真・富田敏夫